

タイトル	「幸い」の意味と用法—「あいにく」との比較の見地から—
著者名 (所属)	許 燕 (名古屋大学人文学研究科博士後期課程3年)
連絡先 E メール	hoyonx@yahoo. co. jp

## 論文内容

本発表では、典型的な評価副詞とされる「幸い」の意味・用法を「あいにく」との比較の中で考察し、〈コトガラ評価〉における両副詞の相違点を追究する。ここで言う〈コトガラ評価〉は「コトガラ評価：叙述内容＝コトガラは、意味的に大きく命題・出来事・人の行為などに分けうる (工藤 1997[2016: 62])」という記述によるものである。

- (1) 若者に幸いあれ。／幸いのために全力を尽くした。【名詞】
- (2) 幸いな年越しを迎えられた。／大学生活は幸いなひと時だった。【形容動詞】
- (3) 円安が幸いしてお土産代がだいぶ浮いた。【動詞】
- (4) 幸い浪人することなく、現役で第一志望校に合格できた。【副詞】
- (5) コロナ検査に引っかからず無事帰国できたのは、幸いだ。【副詞】

「幸い」は、なぜこのような多彩な品詞性を持つのだろうか。「幸い」や「あいにく」の先行研究には、位置づけを行ったもの (三上 (1953)「約束手副詞」、渡辺 (1971)「誘導副詞」、中右 (1980)「命題外副詞<価値判断の副詞>」、工藤 (1997)「評価副詞」)、意味・用法の記述を行ったもの (森田 1989, 飛田・浅田 1994)、位置づけと意味・用法のいずれも指摘したもの (中田 (1991)「談話中の副詞の機能<発話行為<断り>」)がある。

研究方法においては、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いて抽出した有効例 1316 例を研究対象に、〈副詞用法〉と〈述語用法〉に分けて考察した。具体的には、述語にかかって副詞として働く「幸い {に／にも／にして}」(4)と、「～のは／ことは、幸いだ」(5)の構文パターンに着目してその使用実態を探る。次いで、「幸い」と「あいにく」の〈評価性〉における相違点について考察した。

その結果、以下のようなことが明らかになった。

比較項目	幸い	あいにく
述語の品詞性	動作性動詞述語文に集中	状態性動詞述語文に集中
程度性を持つ副詞的表現の修飾	程度性を持つ副詞的表現の修飾を受けることができる	程度性を持つ副詞的表現の修飾を受けることができない
確信度や推論の表現の後接	<u>幸い</u> だったかもしれない <u>幸い</u> なはずだ	* <u>あいにく</u> かもしれない * <u>あいにく</u> なはずだ
評価対象	〈人の行為〉評価が優位	〈出来事〉評価が優位
連体用法	副詞としての連体用法がない	天候名詞が 95.2%

今後は、「幸い」の評価対象を〈出来事〉、〈人の行為〉、〈人の性質〉の3つに細分することによって、〈コトガラ評価〉を表す当該副詞の〈評価性〉をより詳細に検証したい。

## 参考文献

許燕 (2024a・投稿中)「「せっかく」の〈評価性〉をめぐる考察—「あいにく」との比較を中心に—」『名古屋大学人文学フォーラム』6／工藤浩 (1997)「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄 (編)『日本語文法 体系と方法』[再録:工藤浩 (2016)『副詞と文』ひつじ書房, 59-80]／中右実 (1980)「文副詞の比較」国廣哲彌編『日英語比較講座第2巻文法』大修館／中田智子 (1991)「談話における副詞のはたらき」『副詞の意味と用法 (日本語教育指導参考書 19)』第三部 pp.81-107, 国立国語研究所／飛田良文・浅田秀子 (1994)『現代副詞用法辞典』[2018年新装版参照]東京堂出版／三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院 [1972年復刊を参照、くろしお出版]／南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館／森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』角川書店／渡辺実 (1971)『国語構文論』塙書房